



発行・古平町史編集委員会
編集・古平町史編集室
第五十号（毎月一日発行）
平成五年十一月一日

《五十号》

特集号

この地方、積丹半島一帯は、昔から熊が多く棲息し、繁殖する地区であった。

北海道の熊は、先住民のアイヌの人たちにとっては海や川の魚類と共に、衣食の支えとして欠かせない重要なものであった。彼らは昔からこの熊を生活を助ける神様として神格化し、伝統的にあがめて来た。熊祭りの行事は盛大に行い、熊に対する感謝の意を捧げ、その霊を慰めることが習俗となった。

この習慣が古平・積丹地方に残り、この地方に住んでいたアイヌの人たちが町民といっしょになって、大正初年ころまで雪の二月初、熊祭りの行事として行われていたということを知ることがある。

積丹半島の熊は、余別岳・積丹岳・両古美山・稲倉山・銀山

峠・余市岳と続く半島の尾根伝えに多く住んで繁殖している。

明治初年の開拓当初は、熊が海岸や河口の部落にまで下りて来て、鮭や鱒のほか、畑作物や鶏をとり被害は多かった。

大正年代に入って漸減してい

北海の古平風土物語

古平町方面の熊の話

高橋 源 五口

狩猟頭数は二十頭以上の年が続いていたという。

大正十二年三月（私が高等科二年）のこと、彼岸に入ってからであった。古平の奥から追い出された親子（母子）熊が、尾根づたえに本陣の沢、港町、新地町の裏山を抜け、群来村の美国道を横切り、丸山岬の突端に追い詰められたことがある。進退極まった親子熊は、百五十ヤードほどもある丸山岬の崖から海に飛びこんだ。可哀なことであつた。

これを見ていた丸山岬下の種

残っている。

熊（山おやじ）は、今もなお積丹半島の尾根づたえに棲息し繁殖している。山の雪が解け出すと冬眠からさめて穴を抜け出し、食糧を求めて奥の尾根から下りてくる。

木の芽をかき、川魚を取り、山菜採りの人々を驚かし牧場の馬や牛を襲つたりする。夏から秋にかけては、畑のとうきび、いも、すいか、かぼちゃなどを手当たり次第に食い荒らす。

× × ×

この稿を書きはじめた昭和五十四年、五月下旬から六月上旬にかけて、沖町地区の古平町農協牧場で放牧中の子牛が熊の被害をうけた。また、沖村川に山女釣りに入ったベランの釣り人が行方不明になり、同じ川ぞえの下流の笹やぶに竹の子とりに行った地元のお婆が見えなくなっている。地元の人たちや消防団員、自衛隊員などが連日のように搜索に当たったが、熊の糞と足跡だけが残され、結局、発見することはできなかった。あとには、熊による遭難という悲話が残った。

『せたかむい』に投稿 して五十回を迎える

このちっぽけなかわら版が、
よたよたと五十回続いたことを
喜んでゐる一人ですが、何より
も編集者のご苦労が無ければこ
こまではこなかったろうとしみ
じみ思っております。

私は忘れられていく「ふるさ

故郷を想う 福井孝平

との歴史や文化」などを、気軽
に茶飲み話のつもりで書くこと
を心がけてきました。まあ、町
の歴史というよりも外史という
つもりで、身辺のことからはじ
まり、聞いたり、記憶にあるこ
と、あるときは同窓会誌、また
あるときは古老からのネタを集
めては書いてみました。随分と
面白いお話もありましたが、な
にしろ田舎町のことで中には書
けないこともあり、残念ながら
ひとりで楽しんでゐるようなこ

とも沢山ありました。書くにし
てもウソを書かないこと。人様
の悪口を言わないことは守つて
きたつもりです。

いろいろと書いてみると、見
知らぬ方から便りがあつたり、
電話があつたりして恐縮し、顔
の赤くなる思いです。先日、
札幌の方から電話があつて事実
との相違を指摘されたり、また
お礼を言われたりで、その反響
の大きさに今更のようにビク

りしています。

東京の古平会からときどき
お便りをいただいたりしていま
すが、『せたかむい』も九州ま
で飛んで行つてる情報化時代に
いささか驚かされます。

この度、東京古平会の湯田会
長さんからの原稿をいただきま
した。これは遺作ということで
謹んで奥様のご冥福をお祈り申
し上げます。



遺作 望郷の歌

東京古平会 湯田 さわ

落葉松の芽吹きて薫る丸山に

切なく愛し青春の章

虹の橋何時かうすれて古里の

チヨペタン川も遠き日の夢

浜暗く沖は漁火あかあかと

星降らしめて北国の海

爪先の凍れるほどに軋しむ雪

逢う人は知らずふる里の町

夜咲きし葵の花は紫きの

郷愁呼ぶとき太刀に粉打つ

四十年逢わざる人の手を握り

白髪頭にふるびら会なる

酔うほどに飲むほどに出るふる里の

なべて方言も出て刻を忘れる

水連の花しばみゆく沼暗し

死はかかる夜も誰かを誘う

罪業に生きて永かりし七十年

塵にまみれて塵に馴染まじ

乳房なき歌人の生涯読み終えて

冬花の壺に水溢れさす

この十首は、さわ子死亡の一月程前に、約百首
の歌の中から選んだものです。『丸山の潮風』と
いう表題で、近々に歌集を上梓する予定です。

「湯田 知一」

一兵卒の軍隊日記

〈2〉

軍隊生活の第一歩

本間 銀朔

応召者の壮行会は、丸山の下にあった郷社・琴平神社で行われ、武運を祈願し、郷土や家の誉れとしてその出発を祝ったのである。

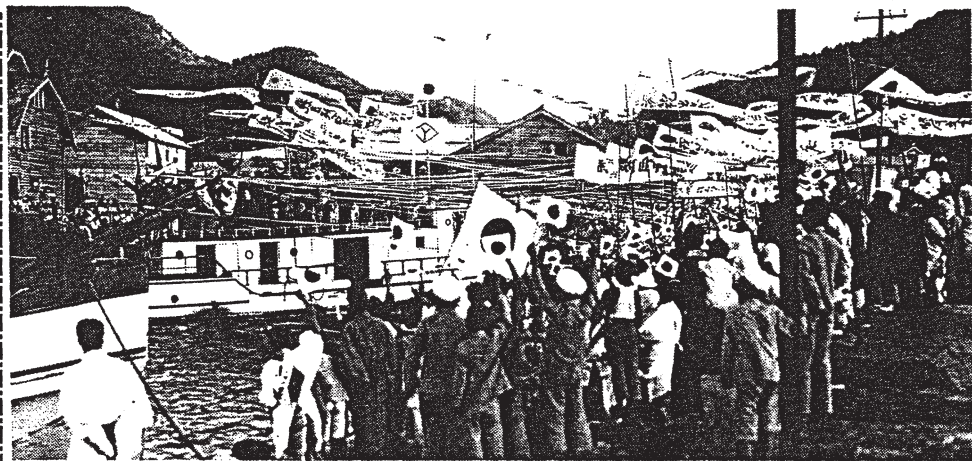
私が役場職員として応召した時は、「本間は体が弱いようだから入隊の時の身体検査で不合格になり、即日帰郷」できっと帰されるだろう。それなら職員の壮行会は省略することにした。う。」ということになったそうである。もつとも、盛大に壮行会をしてもらったのはいいが即日帰えされたのでは、どうも格好がつかないから、「まあ、それでもいいだろう」と思った。いよいよ出発の朝になったがその日は大時化で、定期船は出ないということであった。いつもなら波止場から盛んな見送りを受けて出発するのに、吹雪の中、二十数人は余市まで陸行することになった。

沢江から沖村までの雪路は馬の背のようで、うっかり足でも滑らせたなら海まで落ちて行きそうであった。見送りの人たちは沖村で別れた。

余市駅から夜行列車に乗り、早朝、旭川に着いたが各地方からの応召の人たちで駅は混雑していた。旭川の駅に降りたが、三月というのに寒さの厳しいのには驚いた。みんなで駅から部隊まで歩いたが相当の距離があったようだ。

第九部隊の門を入ると兵舎が並んでいた。兵舎に入るのかと思っていたら大きな倉庫のような建物の中に入れられた。古平からいっしょだった二十数人のうち、何人かは別の隊（自動車隊）へ行ったようだが大半はここに残った。

やがて下士官が来て説明があった。「今日から、お前らはここで寝



起きすることになった。「飯もお祝いで特別のものを作った。」とのこと。見ると七分づき米に大豆とひき肉が入り、

増え、今後も健在で頑張れそうです。五十号特集として増ページし記事も替りました。今後どうぞよろしく——。(M)

※この写真は、昭和十二年八月四日、築港での出征兵士の見送り風景です。
『祝出征翌月文吉君』
『祝出征堤石太郎君』と大きく書かれたのぼりが風になびいています。
時刻は午前六時、船は定期船「絞龍丸」です。
正油で味つけがしていてその上に漬物が二切れのついている。
「これが入隊のお祝いか」と思ったが、腹もすいていたのでうまかった。

ひとこと

夜なべ仕事で始めた「せたかむい」も、不況の中で倒産することもなく五十号の発行に漕ぎつきました。原稿を寄せてくださる方々に支えられ、愛読して下さる方の声援に励まされて、発行部数も五百五十部にも

古平場所と岡田家

(1)

古平と岡田家とのかかわり

『岡田家』とはなにか

明治以前の古平のことを知るには、岡田家のことを知らなければならぬ。岡田家というのはいったい何をしていた家だったのか。また、古平とはどんなにかかわりがあったのか。

当時、松前藩の家臣から、アイヌの人たちとの物品交換などの権利を任された商人を場所請負人というが、今からざっと二百八十年前、このようにして古平場所を請け負ったのが岡田家なのである。

それ以来、慶應二年に種田徳之丞に場所を譲るまで、百五十年余りにわたって鯨漁を中心として古平場所の経営に当たり、開拓の功労者でもあり、その後の古平の発展と深い関係をもっている。

このような岡田家であるので古平場所請負当時の岡田家のいろいろな記録を調べることによ

って、その時代の古平の様子を知ることができるのである。

港町・恵比須神社（現在の厳島神社）は、宝暦元年（一七五一）岡田家の五代当主が創建したもので、御影石の灯籠は古平場所の支配人が奉納したものである。

松前藩家臣の給与と商場

岡田家がどうして古平場所請負人になったのか、そのあたりのことについて当時のことをふりかえってみたい。

昔は、武士のほとんどは知行（ちぎょう 給与）として米を貰っていたが、当時の北海道では米がとれなかったため、松前藩では主な家臣に一定の海辺を与えた。それらの知行主は、アイヌの人たちが必要とするよう

開村百年記念碑

明治十年（一八七七）ころ、青森県三戸郡豊間内村工藤市左衛門から分家した末松さんが泥の木に入植したの、三十二歳のときである。戸籍では、同十四年十二月十九日となっているがそれより前の十年前後のことと思われる。

この入植を記念して昭和五十年九月、泥の木町内会（町内会長・工藤清美）が

『開村百年記念碑』を熊野神社境内に建立した。

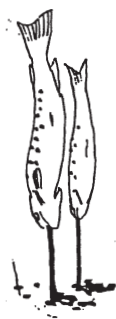
最初に入植した工藤末松さんは、この時の町内会長であった工藤清美さんの祖父にあたり、何かの因縁を感じさせる。

また末松さんは熊の被害を恐れ、出雲の熊野神社にあまりササノオノミコトを奉祀して熊野神社を建てたのである。

な商品を仕入れ、夏になると船を仕立てて自分の知行場所へ行く。そこで海産物などと物品交換（交易）し、それを福山（松前）に運んで本州から来ている商人に売る。その利益が家臣の知行であった。

しかし、それには手数料がかかり過ぎる上、ときには船の遭難や取り引きの失敗もある。やはり「武士の商法」でうまくいかなかった。このような商売の複雑さと危険性を考えると、一定の金額（運上金）を納めさせ、その道のベテランである商人に経営を任した方が得策ということになる。このように知行場所Ⅱ商場（あきないば）を任された商人を場所請負人と呼んだ。これは家臣だけではなく、やがて藩もその交易を商人に任せようになった。

近江商人として福山に支店をもっていた岡田家は、このような制度ができたところからすでに古平やほかでも場所請負人をしていたのである。



ふるさとと群像

63年間日記を書き続ける

高野名 幸作さん

- 1 -

高野名幸作さんの父・石蔵さんは二十歳前後の時（明治十年ころ）に、佐渡郡真野村から北海道に新天地を求めて古平に渡って来た。

幸作さんは明治十九年に生まれ、浜中小学校を卒業すると当時の商家のしきりとして、遠戚に当る小樽の豪商・岡崎商店に見習い奉公した。奉公しながら主人の勧めもあり小樽英和学校の夜学部に学んだ。日記はこの年、明治三十三年一月、十四歳の時から書き始めている。

はじめは商売の控えなどが主であったが、小遣の使いみちも詳しく記帳している。

向学の念に燃える幸作さんにとって英和学校への入学は大きな励みになり、楽しみだったよう、学校へ出た日はすべて日記に「通学」と書いている。

六月十五日、札幌祭りに仲間

といっしょに行った日のことをこう書いている。

× × ×

「六月十五日 風吹ク十九度
此日ガ札幌神社祭ノ為我等六名連デ午前十一時汽車ニ乗込み札幌へ行く。商店二宿泊シ、其日早速札幌神社ニ参拝シ、ソレヨリ所々方々見物致シ家ノ飾ノ壯観ナルニ驚キタリ。又山ハ七ツデ神功皇后、楠木正成、司馬江漢、タコ山等出テニギヤカナリキ。夜二入りテハ明リ白昼ノ如ク、見セ物山ノ如クニ立チ

祝聖会（しゅく）

禅源寺の岳轉和尚は、仏教を通じての修養の会を開いた。これは特定の宗教に偏るものではなく、禅に加わり、読経し、法話を聞いた後は和尚の自室で自由に歓談したが、その時和尚は

並び我等モソレヲ見物致シ寝タリ。」

明治三十三年から昭和三十七年までの六十三年間にわたって書かれた日記のうち、大正八年以後の分は整理しているが、家族のこと、商売のこと、役職についていて知りえたこと、町内のいろいろな出来ごとや国内外の大きなニュース、その日の天候と気温までが達筆で書かれている。また、この日記の内容にひとことふれると、日常の出来ごとを記録しながら、家族への思いやり、日々の生活への感謝の念をにじませ、他人の中傷や悪口めいたことなどが一切無いことである。

× × ×

日本にとって歴史の大きな転機となった終戦、昭和二十年八

よく京都などから取り寄せたお菓子を留意していたという。

集まるのは毎月一日と十五日で、午前六時になると本堂に集まった。この会は大正の初めから和尚が遷化するまで続き、寒修行なども行った。この会には次の人たちが参加した。

月十五日の日記である。

「四時半起床、祝聖会例会日でお花を持ってお詣りする。読経終って後墓参す。帰って和尚の室で雑談、七時帰宅。十時に畑へ行く。イタドリ俵入りしている。妻、弘は川原でヨモギ取りやる。中食後、二時頃自転車で急ぎ来たり、正午のラジオで日本無条件にて講和を申込んだとの事。原子爆弾とソ連の戦争参加で吾方益々不利になった為との事。重大事件である。」

高野名幸作さんは昭和四十三年十月七日、八十二歳のご高齢でお亡くなりになったが、これらの日記は当時の古平のことを知る上で貴重な資料であり、ご家族からの寄贈をいただいたことを深く感謝しております。

高野常吉・高野名幸作・原田吉郎・岩井米作・福井庄平・梅野清太郎・北浜嘉雄・松岡秀雄・西嶋留太郎・藤田秀雄・山田次郎・武川清・品田孝・名達博・大澤雋・三浦銀治・水見八郎・津田節彦・阿彦豊作・小野寺弥惣次そのほかの人たちがいた。

夕映えの空に 過ぎし日をおもう

池田 テル

子どもらと鶯の声を真似につつ坂道遠く時きし山畑
跳び交へるこおろぎ多し坂の道敷の中には昼を鳴きある

もう五十年の昔となった大東
亜戦争(後の太平洋戦争)のとき、うち続く食糧難に遠い山を借りて耕し、馬鈴薯と南瓜を作りました、その後も何年かそこへ西瓜やとうきびを蒔いていました。

この畑につづいて「やまやしの畑」と呼ばれている菜萵(グミ)原がありました。昔、畑だったというその草むらには美しい花が沢山たくさん咲いていたし、藪に入った所には珍しいアケビの木もありました。

ここに生えている蒔(フキ)蕨(ワラビ)などの山菜は帰りの土産になりましたし、子どもらは草花を摘み、バッタや蜻蛉(トンボ)を捕まえたりしていました。時々菜萵の木の根元からびよこんと出て寄って来る可愛い栗鼠(リス)、子どもら

が差しのべてやる餌を両手で食

べる仕ぐさに喜んで、しばらくそこを動かなかった幼子のこと
が今もほえましい思い出となつています。

秋、名月の頃この菜萵原の紅く熟れた実が夕日に映える光景は、まるでルビーの宝庫のようでした。下校後の子どもらが草笛を鳴らしながら来て、籠や小箱に実を摘んで帰るのでした。永い間すっかり親しんできたこの山畑を、ふつりとあきらめてしまわなければならぬ時がきました。

近くいる熊に気づきし夫は吾が腕をつかみて逃げしあの坂馬鈴薯を掘っていた夫がにわかに鎌を放り投げ、私の手籠をもぎ取って捨てると、私の手ぐいぐい引張って坂を下り、沢口さん (次ページ上段へ)

—— 七 ——

「海鼠(ナマコ)引漁のこと」
海鼠引漁は網を小舟に積み、かねてから見当をつけておいた場所はこの網を下ろし、そこから百間(百八十ヤシ)ほど舟を漕いだところに今度は碇(いかり)を下ろし、網につけた綱を引いて網を船の中に引き揚げる。

なぎがよくて良い場所に当たると、百二、三十を引き揚げることがあり、一人で一日、二千程もとることがある。

とった海鼠は、舟に積んだまま運上屋の前浜まで漕いで行く。すると会所から改めに係の人が出て来て海鼠の数を数える。数える時は、海鼠五つをひとまとめにしてシネツブ(一つ)、トップ(二つ)、レップ(三つ)と

アイヌ語で数える。十はアイヌ語でワンベというが、トオと日本語でいう。

係の者は手帳にアイヌの名前を書き、五つづつのものを十数えると正の字の「一画」を書き、

アイヌの(ことわざ 世間ばなし集)から

数えるに従って一画づつ書き加えていく。一画は海鼠五十に当るので、正の字が一字で二百五十ということになる。

その日の漁で、五百以上とった者には濁酒一盃(コップ二杯半)、千以上とった者には同じく二盃を褒美として与えた。これは酒の好きなアイヌの人たちにとっては大きな魅力であった。
このあと、海鼠を大鍋で煮て煎海鼠(いりこ)にする。

× × ×
△煎海鼠△ アイヌの人たちは、ナマコを十ずつ串に刺して炉や日光に当てて干した後、串を抜いて俵に詰めた。

いりこの作り方にもいろいろある。腸を取るもの、取らないもの、煮るもの、煎るもの、煮るのに海水を使うもの、真水を使うもの、割くもの、割かないもの、干すのに天日か火力か、燻すもの、燻さないもの、着色するもの、しないもの、また着色の仕方にもいろいろな方法があるという。

の所まで走って来てから私の手を放し、「熊だ、すぐ近くにいます熊の軒だ。」と言う。夫はその足で、狩猟で名の知られる故人になられた山本豊太郎さんの家へ向かいました。

翌朝、山本さんや越前さんら三人が山へ出掛け、その日の夕方出戸の沢付近にいた熊を見つ

けて射止め、無事山本さんの所へ引き揚げて来ました。身長二ヤミ、体重二百五十という熊でした。その熊を見に大勢の人が集まりました。

次の日、夫と畑へ行ってみましたら、熊の大きな足跡が家の畑を横切り隣の畑に続いていました。前の年の秋にも、近くの



笹藪から頭を出している熊を見た人がいたそうです。

そんな事があつたりして、もうあの山畑には行くこともなくなつてしまつたのです。

樺太は半島か？

それとも島か？

今なら地図を見ればすぐにも分かることだが、二百年ぐらい前までは陸続きで半島なのか、島なのかはつきりしていなかった。地図には、樺太（サハリン）らしいのが、半島と島と二つ描かれたのもあつた。大陸の地続きならロシア領か支那（中国）領ということになるうし、島であれば蝦夷地のアイヌが住んでいるので松前（日本）領ということにもなる。どこの国の領土であるかがはつきりしていなかったわけである。

積丹半島沿岸の漁村は、切り立った崖が海岸まで迫った険しい地勢に妨げられていて長い間「陸の孤島」とか、方言で「えんかま」などと言われてきた。明治の末ごろからは余市山道の改修工事が行われ、大正末には鉄道建設の運動が盛り上がったものの、ようやく道路が整備されたのは昭和三十三年の海岸道路、その後の神恵内道路の開通であつた。

開設したもので、当時は新道と呼ばれた。これにより美国町まで夏は荷馬車、冬になると馬そりが通うようになった。以来この山道が永い間両町を結ぶ唯一の道路であつた。昭和三十二年、道道神恵内・入舸線のうち古平・美国間自動車道路改良工事が北海道開発建設部で検討され、同三十五年四月、総延長二千九百四十ヤミ、総工費四億五千四百万円で三井建設機により着工された。この間、群来村の関係住民と

工事による補償問題については相内武さん宅で協議会が開かれたが、この問題は住民の同意を得て円満に解決し、その年の九月、地盤が懸念されていた丸山遂道の掘削が始まつた。着工してから五年半の歳月をかけ、同四十年十一月、青い海と海岸の景勝地を走る古平・美国間海岸道路が完成した。難工事であつた丸山遂道は同三十六年十一月に貫通したが、落盤による事故で大野一郎さん（当時五十四歳）が尊い犠牲となつた。

古平・美国間海岸道路の開通式は昭和四十年十一月二日、丸山遂道入口前で古平・美国両町民の喜びの中で、関係者多数が出席して行われた。

古平・美国間海岸道路完成 旧山道はハイキングコース [昭和40年]

△△△日はこんな日▽▽

カムチャッカの出稼物語

「監獄」の次は「北洋」——？

大沢 松蔵（談）

カムチャッカは夏だといって
も夜はストーブを焚かなければ
ならなかったし、それに霧の多
い慣れない気候の所で仕事もき
つかったが、なんといつても眠
れないのが一番つらかった。働
くことにはなれてる体の頑丈
な漁夫でも、百人の内、漁期中
皆勤するのは五、六人しかいな
かった。

病気になるっても売薬の薬箱が
ある程度で、よほどのことでも
なければ看護してくれる人もい
ない。また、仕事を休むと給金
にも影響するので、少しぐらい
の病気でもみんな無理して働い
た。もし死んだりした時は、陸
では火葬にしたが、船では天幕
にくるんで水葬にした。

当時日本領であった千島に近
いとはいうものの、カムチャッ
カはソ連の領土であり緊張して
いた。そんなこともあり漁期中

は沖を日本の軍艦が通るのが見
えた。これは漁の監視と、漁船
団の保護などが目的のようだっ
た。カムチャッカへの出稼は、
日魯漁業株式会社一社の経営で
あった。

八月のお盆のころ、十四、五
日ころになると約二か月ほどの
漁期も終わり、そろそろ帰りは始
める。八月中には家に帰れるよ
うに漁場を切り揚げるが、その
ころになると霜がおり、もう雪
が降りだす。

給金は、差し引いた分を函館
で受け取る。一般の漁夫で百二

（下衆）と（森衆） 小樽か
ら函館までの西海岸出身の漁
夫は下衆、また茅部郡周辺の
出身者は森衆と呼ばれ、遠洋
漁業の漁夫として最も優秀だ
といわれ、このほか北海道の

十円から百三十円ぐらいであつ
た。漁夫の中には、貰った金を
景気よく女遊びですつかり使っ
てしまう者もいた。それであと
になると、それぞれの町村の役
場に一括して送金をするように
なり、各人が役場へ行って給金
を受け取るようになった。古平
の役場では、出稼関係の仕事
する係がいて、松岡秀雄さんが
永くその係をしていた。一時家
族が函館まで出迎えに来たこと
もあったが、経費や時間のこと
があつてそれはなくなつた。

それぞれの町村には、会社か
ら任されて出稼ぎに行く人たち
を集めたり、その頭になる人が
いて、たいていは五、六人を連
れて行ったが、その人数の多少
が頭になった人の発言力に影響
した。

遠いカムチャッカなどへ出稼

漁夫は漁業者が争って雇用し
たという。だからといって、
出身地によつて給金に差をつ
けることができなかったのだ
いきおい北海道出身者が先に
採用になることが多かった。

ぎに行く人たちは、大変信心深
いところがあつた。生命の危険
にさらされていることがそうさ
せたのかもしれない。

観音滝を霊場として、その道
ばたに三十三体の観音像を祀る
ようになったが、古平出稼供給
組合では「カムチャッカ観音」
十七番を建立して、出稼ぎに行
く人たちの安全を祈つた。この
観音を彫つたのは、今の文化会
館下の通りに住んでいた下田石
屋さんである。

古平出稼供給組合はのちに古
平保護組合と名前を替え、古平
保護組合十周年記念として、九
谷焼の急須・茶わん・茶盆のセ
ットを配つた。

最後に、「どうしてそれほど
つらい、危険なカムチャッカな
んかへ出稼ぎに行くのか。」と
いうことだが、古平の鯨漁は不
漁続きだったし、ほかにこれと
いう仕事もなかった。カムチャ
ッカへの出稼ぎは何といつても
給金が良かったことと、契約し
た時（正月前）と出発前に前渡
金が貰えることが大きな魅力だ
ったからだ。